

## ひわに学院大学 令和四年度 一般選抜(国語)

(注)設問で指示をした字数には句読点等も含みます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読者の中には、上司などから「なにか具体的な案を考えてこい」と言われた経験がある人がいるのではないか。どういうわけか、世間一般では、「具体的」がとても良い意味で使われているのだ。それは、ぼんやりしたものではなく、しっかりと考えたもの、ちゃんと調べたもの、実際に役に立つような現実性を持ったもの、といったイメージだろうか。この反対の(1)「抽象的」とは、曖昧でわかりにくいもの、まだきちんとまとまっていない考え、実現が遠いもの、単なる(2)絵空事、とイメージする人が多く、「抽象的」は「いけないこと」だ、という感覚が広く(b)シントウしているように見受けられる。

たとえば、「もつと具体的に説明してくれ」と要求されることは多いのに、「もつと抽象的に話してくれ」と言われたことがある人は、まずいまいだろう(実は、研究者の間では、このように言うことがあるし、(2)有名な数学者が弟子にこう諭したという逸話も聞いたことがある)。

抽象画というのは、わけのわからない絵のことだ、と認識している人が多い。それどころか、「抽象」という言葉を、「抽象画」以外では使わないという人だっている。「具体的」という言葉の使いやすさに比べて、「抽象的」という言葉は使いにくく、(c)馴染みがない。意味がよくわからないからだろう。

抽象画というのは、具象画ではない絵のことだが、では具象画とは何かといえ、それは目に見える物体を見たまに描いた絵のこと、その絵を見た人の多くが、「ああ、これは山の風景だ」とか「綺麗な花だな」と対象が何かわかるものをいう。そんなところから、理解できるものが具象画であり、理解できないものが抽象画だと考えている人が沢山いる。「抽象的」の意味も、この抽象画の「わけのわからなさ」に引きずられてしまっているようだ。

絵画というものは、もともとはすべて(たぶん)具象画だった。何故なら、絵の目的は、見たものを記録するためであったし、それを他者に伝達するためだったからだ。この場合、他者に「それが何か」をわかってもらわないと意味がない。

しかし、現代アートは、このような目的を(1)持っていない。芸術として描かれる絵は、それが何を描いたものかを伝えるためにあるのではなく、作者がどう感じたのか、ということと訴えるものになった。どう感じたかというのは、「山だ」とか「花だ」という具体的なものではなくて、たとえば「凄い」とか「綺麗だ」という感情である。個人の感情を言葉ではなかなか言い表せないが、それを絵で表現するのだ。ある芸術家は、具象画を描いて、自分が見たものを素直に他者にも見てもらいたいと思うし、また別の芸術家は、自分が感じたものそのものを絵にしようとする。「凄い！」という感動を絵にするのである。これが抽象画だ。その絵を見た人が、「凄い！」と感じれば、気持ちは伝わったことになる。何が描いてあるのかわからなくても、ただ「あ、綺麗だ」と感じれば、それが抽象画が伝えたかったものかもしれない。

辞書を引いてみよう。「抽象」というのは、「事物または表象のある側面・性質を抜き離して把握すること」とある。このとき、大部分の具体的な情報が捨てられるので、「捨象」という行為が伴う。中身の食べられるところだけを抜き出して、外側の皮の部分捨てる、と考えるとわかりやすいだろう。

どうして、このように情報を捨てるのかというと、そうすることで、何が本質かがわかりやすくなったり、別の多数のものにも共通する一般的な概念が構築しやすくなるからだ。

一例を挙げれば、数字がそうである。世の中にあるものを、ひとつ、ふたつと数えることを人間は思いついた。数えるものが何であるか、個々に(d)サイはあっても拘らず、そういつた①的な情報を一旦捨てて、個数として取り扱う。そうすれば、数の計算を行うことができる。これが数学だ。数学というのは、ものごとを極限まで抽象化した考え方といって良い。世の中にある諸問題は、数学のとおり簡単にはなかないかいないが、しかし、それでも我々は、数の計算ができることで、複雑な事象を比較的楽に処理できるようになった。

抽象化するときに失われた情報は、不要だったわけではない。綺麗さっぱり忘れてしまえ、というのではなく、一旦それを棚に上げて考えてみよう、という意味だ。そうしないと、見かけの複雑さに囚われ、問題の本質が見えにくくなり、②的に判断を誤るからである。

林檎が幾つかあったとき、それを二人で分けるために個数を数える。実際には、それぞれの林檎は大きさも違うし、もしかしたら腐っているものがあるかもしれない。けれども、そういつた情報を捨てて、ひとつ、ふたつ、と数えられるような「ほぼ同じもの」だと仮定するわけである。この「仮定」こそが、人間の高度な思考の一手法といえるものだ。

頭の良い人間でも、一度頭に入ったものを「忘れる」ことは簡単ではない。客観的に考える場合には、自分の経験や知識や立場を忘れる必要があるし、抽象的に考える場合には、表面的なもの、目の前で見えているものに囚われないことが大切である。これはたしかに難しい。でも、できないわけではない。人間にはそれだけの能力がある。これができるから人間だ、といっても良い。

身近な例でいえば、「相手の身になって考えること」は、人間以外の動物にはほぼ不可能だろう。しかし、人間にはそれができる。どうしてできるのかというと、人間は「想像すること」ができるからだ。この「想像すること」が、人間の思考の大きな特徴であり、さきほどの「仮定」も、一種の想像である。

想像というのは、現実にならないもの、見えないもの、経験したことがないもの、今直接には関係のないもの、そういう(e)ミチで不在のものを考えることである。これは、主観的なもの、具体的なものに囚われていると難しい。何故なら、想像する行為が、現実認識にとつて障害になるので、逆にこれを規制(自制)しようとする生理的に働きかけるからである。(Ⅱ)、自分が想像するのを、自分で邪魔するのだ。

③ な夢を見ることは、誰にだってできる。特に子供の頃には、そういう夢を頻繁に見たはずだ。子供は、夢でなくても、現実離れしたことを考える。それを大人に話すと、「そんな夢みたいなこと言うな」と叱られるから、だんだん周囲との(A)折り合いをつけるようになる。この折り合いが「常識」である。常識が備わってくると、想像力は④を潜めざるをえない。想像したものを自身で否定するうちに、だんだん考えないようになる。想像力を使う機会が、普段の生活では滅多にない、といっても良い。想像力など働かせなくても生きていけるし、(Ⅲ) 変なことを考えない方が生きやすい、とさえいえるかもしれない。

しかし、物事を客観的に、そして抽象的に考えるには、どうしても(Ⅲ) 現実から飛躍する必要がある。それは、実際には個々に違いがある林檎を、同一のものとしてイメージすることと同じだ。そういう「仮の発想」がなければ、物事を抽象的に捉えられない。また、自分の目ではない視点を持たなければ、客観的な全体像は見えてこない(想像できない)。

(森博嗣『人間はいろいろな問題についてどう考えていけば良いのか』新潮新書)

問一 傍線部(a)～(e)のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

- (a) 絵空事 (b) シントウ (c) 馴染み (d) サイ (e) ミチ

問二 [ ]①・②に適する語をそれぞれ次より選び、記号で答えなさい。

- ア、抽象 イ、主観 ウ、結果 エ、物質 オ、捨象 カ、具体

問三 [ ]③に適する四字熟語を次より選び、記号で答えなさい。

- ア、前代未聞 イ、支離滅裂 ウ、優柔不断 エ、荒唐無稽 オ、大言壮語

問四 [ ]④に適する語を次より選び、記号で答えなさい。

- ア、羽根 イ、鳴り ウ、足音 エ、飛び オ、声音

問五 二重傍線部(A)「折り合いをつける」の意味として適するものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア、話し合う イ、あきらめる ウ、解決する エ、協調する オ、妥協する

問六 ( )Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに最適な語を次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、むしろ イ、やはり ウ、そこで エ、つまり オ、そして カ、もはや

問七 抽象化することの意義や利点について、筆者はどのように述べていますか。文中の表現を用いて、三点答えなさい。

問八 傍線部(1)『「抽象的」とは、曖昧でわかりにくいもの』とありますが、このようなイメージが定着した原因について筆者はどのように述べていますか。文中の表現を用いて、簡潔に答えなさい。

問九 傍線部(2)「有名な数学者が弟子にこう論じた」とありますが、その理由を筆者はどのように説明していますか。理由を述べられていると思われる一文を抜き出し、最初の七字で答えなさい。

問十 傍線部(3)「現実から飛躍する」とありますが、このことを具体的に説明している一文を抜き出し最初の七字で答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。  
\*一部改行箇所等を改めています。

きみは神経衰弱だから。焼魚の背骨を除きながら、教授は言った。

「どういうことですか?とおれが訊いても、教授はそういうことだよとやけに(a)素っ気ない。

「ずっと研究室に籠もってばかりというのはいけないよ。(1)もつと外の空気も吸って、人間の幅を広げることも必要だよ」教授は静かな(b)口調で醤油を魚に垂らす。おれは教授が何を言わんとしているのかつかめず、一向に箸が進まない。

「助手のことですか?」それもある。でも、それだけじゃない」

教授は短く返事をして、むしゃむしゃと魚を食べ始めた。魚を食べ終えるまで話す気配はない。元々、教授は研究室でもほとんど口をきかない。そんな教授から昨日、少し話したいことがあるからといきなり電話がかかってきたときには驚いた。学校の近所の定食屋で待ち合わせをしたが、夏休みということもあって、夕飯時でも店内は閑散としている。扇風機がレジの横でさびしげに回っている。

「どういう意味で教授がおれを神経衰弱と言っているのかはわからない。確かに助手との関係はうまくいっていない。そのせいで、研究室の雰囲気はひどく(A)ぎく( )していることも承知している。だが、おれは自分の研究に真面目に打ちこみたいと思っているだけだ。人がどう言おうと、断じて神経衰弱なんかじゃない。

「前の実験の結果が駄目とわかってから、ずいぶんきみは焦っているように見えるね」味噌汁をすすりながら、教授はようやく口を開いた。おれは魚をつつく箸を止め、ハアと曖昧にうなずいた。

「研究に一生懸命になるのもいい。でも、それだけじゃ駄目だよ」

「どうしろというんです? 研究室を辞めろということですか? はつきり言ってください」「おやおや、きみは辞めたいのかい?」

おれは①首を振った。「じゃあ、妙なことを言うんじゃないよ」教授は少し笑って、おれをたしなめた。

「きみは心持ち、神経が(c)カビンになっていると思うんだな。研究室の人間からも、そんな話を三、三聞いたよ」

「誰がそんなことを言っていたんです」教授はおれの言葉には反応せず話を続けた。

「僕は別に悪いことじゃないと思う。誰にだって、そういうときはある。要は少し、余裕を失っているだけだ。僕はきみに余裕を取り戻してほしい。そこでだ」教授は静かに言葉を切ると、おれの顔をじっと見つめた。「少しだけ、大学を休んでみたらどうかな?」

おれは箸を止めたまま言葉を探した。いきなり学校を休めと言われても、どう答えていいかわからない。(2)食べ終えた教授の前から店員がさつさと皿や碗を持ち去っていく。茶をすすりながら、きみは教員免許を持っているかと教授は訊ねてきた。大学四年生のときに取りましたと答えると、教授はおもむろにうなずき、きみ、教師として働くつもりはないかい? と②話を打ちかけた。

「教師ですか?」思いもしない言葉について大きな声が出た。

教授はハンカチで口のまわりを拭い、話し始めた。私の大学時代の同級生に大津という男がいる。私立高校を三つも経営している男なのだが、近頃電話をしてきて、高校で理科を教えることができる人はいないかと訊ねてきた。教師が一人、産休を取ることになり、代わりに教師を迎えたいのだが、これがなかなか見つからないというのだ。

「常勤講師という(d)タイグウだが、どうだろう? 期間は二学期だけという話だから、年内いっぱいということになるけど——」教授の視線が静かに頬に刺さるのを感じる。確かにきみは線の細いところもあるが、一方で適応力もある、案外教師の職に向いていると思うんだな、などと教授は③ことを言う。それってどこの高校ですか? というおれの問いに、教授はグラスの麦茶をこくりと飲んだ。「奈良の高校だよ」「奈良ですか?」おれは思わず声を上げた。ずいぶん遠いところである。

「僕はとてもいい話だと思うんだな。奈良といったら鹿だろう、大仏だろう。いかにも、ゆったりしてそうじゃないか。悠久の都の余韻

や深し、心の余裕を取り戻すには最適だ」

(3) 店員がやってきて、食べ終えたばかりのおれの皿を下げていく。おれは奈良というものをイメージしようと努めたが、教授の言う鹿と大仏以外、何の映像も浮かんでこない。そもそもおれは生まれてこの方、箱根より西に行ったことがない。

「あと、その高校というのが女子校なんだな」「じよ、女子校ですか？」

「いやいや——別にそんな顔をする必要もない。こんなむき苦しい男ばかりの研究室にいるより、若いエネルギーに囲まれているほうが、心の健康にもいいに決まっている。どうだろう、一つ新しい勉強をする気持ちで奈良に行ってみないか？ 年内は休学にして、年明けに復学できるように手続きは僕がしておく。何、ちょっとした代講を務めに行くようなもんさ。それに大津が困っている様子だったから、僕もぜひ助けてやりたくてね」

細かい水滴に覆われた麦茶のグラスを見つめながら、教授は何を言っているのだろうと思つた。素人にそんな簡単に高校教師の仕事ができるはずがない。確かに教育実習には行った。だが、それは六年も前の出来事だ。しかも女子校である。とてもじゃないがそんなところで教える気にはなれない。

まったく馬鹿にしている、こんな話はさっさと断ろう——そう決めて顔を上げたとき、教授が④ 助手の名前を口にした。

「彼が今度、九州にある大学の助教授の職に就くかもしれないんだな。十月末に面接試験があつて、彼は論文のデータを揃えなくちゃいけない」嫌な予感におれは息を殺し、教授の次の言葉を待った。

「そのためには今きみが使っている機材を使用する必要がある。知つてのとおり、我々のやっている研究は何せ『食えない』分野だ。きみのせいで一度は流れてしまった助教授の話だ。今回の彼のチャンスを僕は応援してあげたい。機材が一つしかない以上、きみの実験を中断してもらうしかない。きみが彼の手伝いをしてくれるのがいちばん望ましいが、それはきみも彼も望まないだろう。まあ、どちらにしろ、きみの実験はしばらくお休みしてことだ。だから、ここは思いきって奈良に行つてみなさい。何、ちょっとしたパカンスと思つたらいい」

額が奇妙に突き出た、いつも(e) 陰気な顔をした助手の顔が脳裏に浮かぶ。去年の秋のことだ。おれは研究室のパソコンのメンテナンスの最中、誤って一台を初期化してしまつた。そこには助手のデータが詰まつていた。名古屋の大学に助教授の口があるからと、ただでさえ蒼い顔を、さらに蒼白く変え、助手が三カ月かけてようやくまとめた論文データを、おれはクリック一つで、ここごとく消してしまつたのである。結果、助手の助教授になる夢は無残にも潰えた。同じ研究室にいただけに、助手の失望はよく理解できた。それ以来、助手とはほとんど口をきいていない。研究室の連中は、常に無言の非難をおれに投げかけてくるようになった。研究室に居場所がなくなったことに気づいたが、おれだつて他に行く場所はない。

今年になって、おれは半年以上かけた実験に失敗した。それを知つた助手が隣に来て、蒼白い顔に笑みを浮かべ、『ざまあみろ』と言つた。次の瞬間、おれは助手につかみかかつていた。研究室の連中に、(B) 寄つて( ) 取り押さえられた。二人して教授に呼ばれ、原因を訊かれたが、助手は最後まで何も言っていないと譲らなかつた。(4) それ以来、研究室でおれは「神経衰弱」というあだ名をつけられることになつた。

教授がどういう意味で、「きみは神経衰弱だから」と言つたのかはわからない。あだ名のことだけを言っているのではないのかもしれないが、あえて訊ねる気も起きない。しばらく考えさせてくださいと告げて、おれは教授と別れた。

翌日、研究室に行くと、助手がおれの機材の前で実験の準備を始めていた。助手は「今日から使わせてもらうよ」とマシンのをのぞいたまま、⑤ 声で告げた。

自分のノートと本をまとめて、その足で教授の部屋に向かつた。廊下の窓が開いていて、蝉の鳴き声がかたましく天井に響いていた。奈良行きの申し出を受ける旨を伝えると、教授は笑みを浮かべ、Cとおれの肩をぽんと叩いた。

(万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎)

(注) 助教授・・・大学などの教員で教授に次ぐ職階。現在の准教授に該当する。

問一 傍線部(a)～(e)のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- (a) 素っ気 (b) 口調 (c) カビン (d) タイグウ (e) 陰気

問二 □①～⑤に最も適する語句を、それぞれ次より選んで、記号で答えなさい。

- |   |          |         |        |           |
|---|----------|---------|--------|-----------|
| ① | (ア、黙って)  | イ、素早く   | ウ、ゆっくり | エ、慌てて     |
| ② | (ア、平然と)  | イ、案の定   | ウ、唐突に  | エ、遠慮気味に   |
| ③ | (ア、うれしい) | イ、曖昧な   | ウ、適当な  | エ、見当はずれな  |
| ④ | (ア、やはり)  | イ、不意に   | ウ、やっと  | エ、今さら     |
| ⑤ | (ア、冷たい)  | イ、うれしそう | ウ、控えめな | エ、からかうような |

問三 二重傍線部Aは「円滑でなくぎこちないさま」、二重傍線部Bは「大勢が寄り集まって」という意味の慣用句的な表現が入ります。空欄に適語を補って完成させなさい。

問四 傍線部(1)「もっと外の空気も吸って、人間の幅を広げることも必要だよ」とありますが、この後の教授のことばの伏線となっています。それはどのようなことばですか。該当する教授のことばを文中より二〇字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線部(2)「食べ終えた教授の前から店員がさっさと皿や碗を持ち去っていく」、傍線部(3)「店員がやってきて、食べ終えたばかりのおれの皿を下げていく」とありますが、これらは定食屋の「ある状況」の象徴的な光景として描写されています。それはどのような状況ですか。文中の表現を用いて簡潔に答えなさい。

問六 傍線部(4)『それ以来、研究室でおれは「神経衰弱」というあだ名をつけられることになった』とありますが、「神経衰弱」というあだ名をつけられた理由について、簡潔に説明しなさい。

問七 □Cに入る最適な内容を次より選んで、記号で答えなさい。

- ア、コンピュータが一台しかないから仕方がない、我慢してくれ。
- イ、しばらく研究のことは忘れて、休学する方が心の健康にはいいだろう。
- ウ、きつといい経験になると思うから、存分に勉強してきなさい。
- エ、ありがとう、私の友人を助けると思っただけを貸してくれないか。

問八 「おれ」が教授から「無言の圧力」を感じていると推察できる一文を抜き出して、最初の七字で答えなさい。

問九 この場面の教授の説得の方法として最も適するものを、次より選んで記号で答えなさい。

- ア、順次理由を挙げて、相手を納得させながら説得する。
- イ、相手の反応を見ながら話を進め、遠回しに説得する。
- ウ、単刀直入に用件を切り出し、半ば強引に説得する。
- エ、相手の思いを受け入れながら、誘導するように説得する。



正答例 & 解説

2022年度 一般選抜【国語】

正答例

- 一 問一 (a) えそらごと (b) 浸透 (c) なじみ (d) 差異 (e) 未知  
 問二 ①カ ②ウ  
 問三 エ 問四 イ 問五 オ  
 問六 Iカ IIエ IIIア  
 問七 ・何が本質かがわかりやすくなる。  
 ・(別の多数のものにも) 共通する一般的な概念が構築しやすくなる。  
 ・複雑な事象を比較的楽に処理できるようになる。  
 問八 抽象画の「わけのわからなさ」に引きずられてしまっているから。  
 問九 数学というのは  
 問十 客観的に考える
- 二 問一 (a) そっけ (b) くちょう (c) 過敏 (d) 待遇 (e) いんき  
 問二 ①エ ②ウ ③ウ ④イ ⑤ア  
 問三 Aしゃく Bたかって  
 問四 きみ、教師として働くつもりはないかい？  
 問五 (夏休みで夕食時でも) 店内が閑散としている状況。  
 問六 半年以上かけた実験に失敗し、罪もない助手に八つ当たりしたと思われたから。  
 問七 ウ 問八 教授の視線が静 問九 イ

大問	問	配点
1	1	各2点×5
	2	各2点×2
	3	2点
	4	2点
	5	2点
	6	各3点×3
	7	各3点×3
	8	4点
	9	4点
	10	4点
2	1	各2点×5
	2	各2点×5
	3	各3点×2
	4	4点
	5	4点
	6	4点
	7	4点
	8	4点
	9	4点
		合計100点



大学受験のエキスパート！

が詳しく解説！



攻略ポイント

全体で大問が2題で、大問一は評論で設問数が10問、大問二は小説で設問数が9問。設問内容は、漢字問題、空欄補充問題、語句の意味を選ぶ問題、抜き出し問題、内容説明の問題、理由説明の問題、人物像説明の問題である。全体的な難易度は高校基礎から標準レベルで、設問は基礎的な学力を問うものであり、難問レベルのものはない。漢字の読み・書き、抜き出し、選択問題を含む記述式で出題されている。文章は比較的読み取りやすい内容であり、大問一の評論は3000字程度、大問二の小説は3500字程度で、ともに標準的な分量である。設問については、正確に文章内容を読み取る力を問うものである。学校で学習する内容を理解して、丁寧に文章を読み、設問に対して正確に解くことを身につけよう。そのうえで、びわこ学院大学の過去問題を解いてしっかりと準備しよう。過去問題は必ず時間をはかり、2回以上解いて、読むスピードや解くスピードといった時間配分を確認しておこう。

大問 一

問八は理由説明の問題である。「抽象的」は「曖昧で分かりにくいもの」というイメージが定着した理由を説明する。第4段落3文目に「『抽象的』の意味も、この抽象画の『わけのわからなさ』に引きずられてしまっているようだ」という説明がされている。そこを解答要素として答案作成をすればよい。しかし、解答欄の大きさからあれもこれもと多くを盛りこむことはできない。解答要素の優先順位をつけて、メインとなる要素を端的に明示して答案作成しよう。

問十は傍線部の具体的内容を説明する問題。まず、傍線部を含む一文を確認しよう。次に、傍線部の直前に「物事を客観的に、そして抽象的に考えるには」という条件が示されていることから、「客観的」・「抽象的」に考える場合について説明している箇所を特定する。第12段落2文目に「客観的に考える場合には……抽象的に考える場合には……」という表現が見つかる。そして、その部分の内容を確認する。「自分の経験や知識や立場を忘れる」「表面的なもの、目の前に見えているものに囚われない」という説明がある。それらは傍線部「現実から飛躍する」という傍線部の具体的な内容となっていることがわかる。

大問 二

問六は理由説明の問題である。傍線部の主語にあたる「おれ」が「神経衰弱」というあだ名をつけられた理由について説明する。傍線部の冒頭にある「それ以来」という指示語がポイント。指示内容である直前の「実験に失敗した→助手につかみかかっていた」という出来事が、あだ名をつけられた理由になっていることがわかる。

問九は人物像説明の問題であるが、何となく考えようとする、どの選択肢でも良さそうに思える。選択肢が短いからと言って「易しい」と考えてはいけない。短めの選択肢は本文中の説明をコンパクトにまとめていると考えて、選択肢チェックは丁寧にこなそう。ア「相手を納得させながら」が不適。「おれ」は「しばらく考えさせてください」と言って、教授の説得を保留している。ウ「単刀直入に要件を切り出し」が不適。エで迷ったかもしれない。「相手の思いを受け入れながら」が不適。教授は一貫して、休学、実験の中断、高校教師の仕事をしずめており、「オレ」の思いを受け入れてはいない。